

■□ 第2部 実践報告 I

『協同を学ぶ』インターンシップ

つながりインターンシップ@協同の取り組み

石澤 香哉子 (一般財団法人地域開発研究所・研究員)



本日は「協同組合での就労経験から学生がどのような学びを得たか」についてお話をしてほしいということでお呼びいただきました。私は普段、東京の一般財団法人地域開発研究所というところに勤めております。基本的には都市計画系の研究所ですが、私自身は元々協同組合の研究者ということで、協同組合とまちづくりというテーマでやらせていただいております。また、今回のテーマにひきつけて言えば、いくつかの大学で協同組合について学生に教える経験もしております、若い世代との交流は比較的持っております。

なお若い世代と一口に言いますが、実際には色々なタイプの人々が存在します。これから私がお話しする「若い世代」は、基本的に都市部の四年制大学に所属する大学生という限定された人々を指すということを念頭に置いて聞いて頂ければと思います。

大学生に協同組合を教える中で気づいたことが、彼らの中での協同組合の知名度の高さと、その一方で理解度の低さです。コープや生協、農協といった名称は知っている一方で、どういう組織であるかは知らず、営利企業や行政組織の一部と思っている学生が非常に多い。その一方で、先ほども Z 世代の話が出てきましたけれども、協同組合が打ち出している価値…たとえば資本ではなく人を中心とした組織であること、民主主義的な意思決定プロセス、相互

扶助、環境や持続可能性への配慮、地域振興など、そういう価値に関心を持つ学生が実際に増えていると思います。また、斎藤幸平氏の『人新世の資本論』を読んで関心を持ったという学生も数名ではありますが出会ったことがあります。ただし、こうした傾向をもって、協同組合的価値観は若者世代と共鳴するものであると考えるのは、少々楽観的に感じます。

なぜそう思うのか。まず、彼らの中の営利企業中心の考え方、あるいは市場至上主義的な考え方が非常に強固である事があげられます。先ほどお話に出たタイム・パフォーマンス (タイパ) もそうですが、結果を最大化すると同時にそこに至るプロセスをどれだけ圧縮できるか、言い換えれば如何に効率的に物事を処理できるのかということに強い関心を抱く学生が多いということは、実際に接していて感じていることです。こうした価値観は、プロセスを重視する協同組合の考え方には馴染み辛いものです。またもう一つの特徴として、これは昨今の国際情勢から来ている側面もあるのですが、社会主義的なものに対する拒絶が非常に強いところも指摘できます。この2点だけでも、今の若い人はSDGsを学んで育った世代で、協同組合的な価値観と親和性がある、とは素直に言い難い側面があることがイメージできるのではないかと思います。

こうした「協同組合の名称だけは知って

おり、SDGs 的価値観を共有しているものの、協同組合とは馴染まない価値観を強固に持っている」大学生像を念頭に置いて授業を組み立てていくのですが、その際に感じているのが、学習だけで協同組合を理解することの難しさです。運動体であり事業体でもある協同組合組織は、学生にとって全く自明のものではない、普段の価値観の外にあるものです。そのため、協同の仕組みを頭で理解した上で、実際に体を動かして体験し納得するというプロセスを踏まなければ、おもしろい試みをしているが自分の人生には縁の無い組織ということで終わってしまいます。協同組合に魅力を感じる層を増やしたいのであれば、学習と体験はセットで行う必要があるということは、授業でいつも感じているところです。

「協同を学ぶ」インターンシップの試み

- ・一般社団法人くらしサポート・ウィズが手がける、協同組合横断的なインターンシッププログラム。
- ・2014年の「プレ企画」から始まり、2015年から本格始動。
- ・就労よりは「学ぶ」ことに焦点を当てたインターンシップ・プログラム。
 - ・協同組合や社会的企業の理念や仕組み
 - ・協同をベースとした経済について
- ・学生の学年・学部は不問。学生の関心に沿ったプログラムを提供。

2023年
報告書
↓



2023年の実績

- ・生協、農協、労協、金融系協同組合、他社会的企業など、計16団体（2023年）が、学生の受け入れを行っている。
- ・参加大学は首都圏を中心に8大学、参加学生は17名。（24年は24名）

さて、ここから本題に入らせて頂きます。今回お話しするのは、体験の最たるものであるインターンシップ（就労体験）に参加した学生が、そのプログラムを経てどのような学びを得たかについてという内容になります。

分析の対象となるのは、一般社団法人くらしサポート・ウィズが主催している『つながりインターンシップ@協同』です。このプログラムは、若い世代が協同組合について学習する機会がないという問題意識から、実際に協同組合で働く経験を通じて各種協同組合についての理解を深めてもらおうというコンセプトで立ち上がったもので

す。2014年度をプレ企画、2015年から本格始動をしており、今年で11年目になります。昨年2023年の実績については、配付資料にQRコードを掲載しましたので、そちらで報告書をぜひご覧いただければと思います。



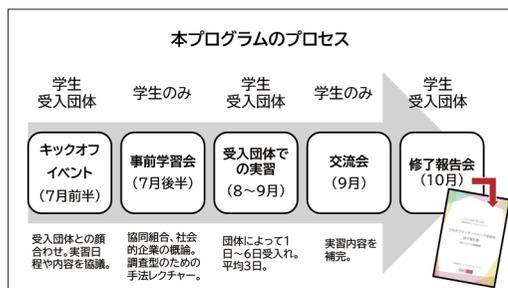
つながりインターンシップ@協同 紹介動画

このプログラムは就労を目的にしたものというよりは学びのインターンシップとして位置づけられており、社会的連帯経済のような協同をベースとした経済について一緒に考えてみようということで、協同組合だけではなく社会的企業も含んだ形で就労体験の機会を提供しています。対象者は幅広く、大学院生を含む全ての学年・学部の学生を受け入れてきました。

特徴としては、様々な業種の協同組合を含む横断的なプロジェクトとして行われており、学生が自分の関心に沿って行き先や仕事の内容を調節できる点がまず上げられます。事務的な負担の関係で2018年以降は1カ所での就労経験となっていますが、以前は必ず労働者協同組合＋希望の協同組合の2カ所に行ってもらっていました。労働者協同組合の就労者＝組合員という仕組みが協同組合を学ぶには適していたこと、また協同労働という働き方が学生に大きなインパクトを与える傾向があったことから、こういうアプローチとなりました。

二つ目の特徴は、各学生が自分の体験を全員と共有する場が複数回設けられていることです。全体のプログラムについて概観

しますと、まず7月前半に学生と受け入れ団体が参加するキックオフイベントがあり、ここでは受け入れ団体との顔合わせと、実習日程や仕事の内容の調整などを行います。7月後半には学生だけで事前学習会を行い、協同組合や社会的企業の概論や、調査型インターンシップの場合は手法について学びます。次に、8～9月にかけて、受け入れ団体での実習を行ってまいります。実習の日程や日数は団体によってそれぞれで、平均でだいたい3日程度実習を行う形になります。その後、9月の交流会でプログラムに参加した学生全体で交流を行い、自分達が経験したことを共有して補完する機会が設けられています。続けて10月に修了報告会が行われ、その結果をまとめて報告書を作成してもらうというサイクルでプログラムが終了になります。



この報告書の学生達の記述をもとに分析を行ったところ、その内容は「どうしてプログラムに参加したのか（参加動機）」「どういうことを経験したのか」「どういうことを学んだのか」の3つのカテゴリに分類できました。資料の表は、上・先頭に来ているものほど多く出てきたキーワード、太字はなかでも言及が多かったものになります。

まず「どうしてプログラムに参加したのか（参加動機）」のカテゴリを見てみると、このプログラムで得られる学びや経験に期

「つながりインターンシップ@協同」分析 ①参加動機

①参加動機		
学び・経験	興味・関心	食、問題意識との合致、地域、会社組織・社会の仕組み
	今までの学びを体感・深化	経験・自己成長
プログラムの魅力	協同組合・社会的企業・非営利組織で働く	現場を見る、自己成長、日本社会を知る
	授業で聞いて関心・ロコミ・紹介	協同組合に関心、非営利組織に関心、協同組合を利用、協同組合を知らない
	協同組合の業務の幅	気になる業務を体験、様々な業務を体験
将来のため	就労に向けて	働くイメージを具体化、社会人として経験を積む、仕事に必要な能力の涵養
	就職活動に向けて	インターンが必要、本格的なインターンの前段階として、就活への集り
	長期的進路への関心	特に金融業
他		大学間交流、閉塞感の打破

※言葉の多さは上に行くほど多く、下に行くほど少なくなっている。 ※言葉数が多いコードについては文字で表記している。

待をしている人、プログラムの内容に魅力を感じた人、将来の就職活動を念頭に参加した人、の概ね3パターンが見られました。細かい動機はそれぞれですが、協同組合のことはよく知らないという人がほとんどです。現在自分が学んでいることや興味があることと、協同組合の活動が合致しているので参加したという動機が多い点は特徴的と言えるかも知れません。それは例えば食であったり、地域コミュニティであったり、福祉であったり、そうしたテーマに関心があって集まって来る傾向が見られました。また、大学の授業で非営利組織や協同組合を学んで興味を持ったという学生や、これからの就活の助走として、幅広い学年・学科の受け入れを行っているこのプログラムに参加する学生もいました。ただし、初めから協同組合への就労が目的で参加する学生はほとんど見られません。

次に、実際にインターンシップを受けて学生がどういう経験をしたのかについてお話ししていきます。まず、どのような経験をしたかについては大きく2つに分けられました。1つ目は、インターンシップの経験を通じて、どういうことで心を動かされたのかに焦点を当てた記述（感情に関するもの）です。2つ目は、経験したことから本人が何を思い、考えたか、実感したかという記述（体験と実感）です。

「つながりインターンシップ@協同」分析 ②-1経験(感情)

②-1何を経験したか(感情)	
驚き・感嘆・印象	つながり・連携 ステークホルダー(特に組合員や生産者)と協同組合の関係、地域との関係、協同組合事業を通じての関係の創出、仲間 働く人の姿・態度・考え、事業内容、労働の大変さ、体験・達成、職場ごとの雰囲気の違い 協同組合を体験して 商品とものごたわり、協同組合の仕組み・立ち上がり方、組合員、会議・話し合い、協同組合と企業の違い、利用者、生産者、利益以外も大切に 社会を知る 社会の問題・仕組み・現状、協同組合の活動領域
楽しさ・喜び	つながり・コミュニケーション リアクション(興奮を聞いてもらうこと・受入団体の対応・利用者の反応)、様々な人と交流、仲間、コロナ下での交流の楽しさ、支えあって働くこと、人のためになること 業務を通じて 業務内容の楽しさ、達成感、業務の工夫 学び 先までの学びとのリンク、新しい学び 社会人との対話
感謝・反省	感謝点、不安・驚化、業務上の難しさ、専門用語に戸惑い、居心地の悪さ、ネガティブな印象

感情にまつわる経験は、さらに驚きと喜びに大別できます。驚きは、やはり自分の知識や価値観になかったものを見聞きすることや、新しいことを知る経験によって起きています。特に、様々なステークホルダーと繋がりがながら仕事をしていることを体感し、それが驚きにつながっている様子が見られました。それから、組合員という存在です。組合員は協同組合の関係者にとっては自明の存在ですが、学生にとってはそうではありません。顧客のポジションであるはずの組合員が活発に協同組合に関する活動を行っていることに、驚き、興味を持ったという感想がよく見られました。

次に喜びや楽しさという感情ですが、それがどのような経験と紐づいているかという、自分の言動に対するリアクションから来ているという記述が非常に多かったです。インターンシップの性格上、学生はベテランの中に新人の状態に入っていくという状況になるのですが、それにも関わらず、社会経験や労働経験が劣っているはずの自分にも発言の機会があり、ちゃんと話を聞いてもらえたという経験が喜びに強くつながっているという傾向がありました。

次に、どこで何を体験し、印象に残っているかについてですが、まず挙げられていたのが職場の雰囲気の良い、居心地の良さでした。また、インターンシップ先で一緒に働く人たちと話す中で、その人達の仕事

「つながりインターンシップ@協同」分析 ②-2経験(体験・実感)

②-2何を経験したか(体験・実感)	
職場	職場の雰囲気 あたたかさ・やさしさ・居心地、明るい・アットホーム・楽しい、受け入れられている・歓迎されている 協同組合らしさ チームワーク、思いやり、意見交換・コミュニケーションの取り方、組織の理念を大事に 労働者自身 仕事へのやる気ややりがい、熱意、利用者第一・丁寧な仕事、勤務態度・プロフェッショナルな風采、生産性 働く場として 安定的な働きやすさ、ワークライフバランス、働く人に寄り添う、働く人の意見が支える職場 仲間・人とつながり 仲間との協同の意識 現場での協同の意識
会議・話し合い	定例会議 協同組合の仕組み、ビジネスマナー、各社入社の事前・事後学習、労務法 事前学習 協同組合の仕組み、ビジネスマナー、各社入社の事前・事後学習、労務法 協同組合内会議 協同の意識、意見を求められる、業務内容を深く知る、詳細な会議録、社会経験の不足、懸念の解消 外部との協同・会議 組合員の態度、商品開発
幅広い事業展開	協同組合事業の広がり 一つがインターンで様々な経験 協同の考えとつながり 知らなかった・インパクト、意の広がり下流までカバー、協同組合の可能性 それぞれの協同との比較 それぞれの協同との比較

の核に熱意ややりがいがあると知ったことがプラスの体験として強く印象に残っているようです。全てのインターンシップ先がそうかはわかりませんが、協同組合や社会的企業で働く人々は、一般的な営利企業に比べて自分たちの労働に社会的な意味付けができている場合が多いのかもしれませんが。それから、組合の活動に関する会議や話し合いの経験が印象深かったという回答も多くありました。ただしこの会議や話し合いへの参加は、学生にポジティブな印象を与えた反面、専門的な用語が多く、飛び交う言葉の意味がわからずに戸惑ったという経験をしてしまった学生もごく少数ですがおりました。

次に、今回のメインテーマである「プログラムを通じて学生が学んだこと」についてですが、この内容もだいたい3つに分けられます。1つ目が協同組合、あるいは協同組合的なものに関する学び。2つ目が知識や技術、スキルを得る学び。3つ目が、本人の価値観に関わるような内面の学び、となります。

「つながりインターンシップ@協同」分析 ③-1「協同組合・協同組合的なもの」についての学び

③-1何を学んだか(協同組合・協同組合的なものについての学び)	
協同組合・協同組合的なものについての学び	協同組合の働き方 働くだけではない働き方、助け合いの精神、話し合いの価値、やりがい、平等、人・つながりが大切に、思いやり・人のため、働く人の尊重、自分たちが事業を興す、魂をつぎに繋げる、安心して働ける、生産性・向上、日本と社会 協同組合への理解 営利企業との違い、社会に必要な、地域課題解決、生活困窮・向上、日本と社会 活動の連携性、組合員との相互関係、利用者第一 傾向として、金融系協同組合、生協、労協に多い、 協同・協同組合について考えたこと これからの協同組合の形、協同組合の欠点・疑問・改善 協同組合の知識 仕組み、理念 協同組合のイメージの変化 知らない・理解が深まる、意外と話し、意外と柔軟 商品についての学び 協同組合を取り扱う商品のこだわり、クオリティ 学んだ協同組合にどう関わるか 協同組合の選択基準へ、利用したい・関わりたくない 学んだ協同組合についてどう考えているか 学んだ協同組合についてどう考えているか

まず1つ目の協同組合に関する学びですが、実際に実務を経験したことによって、協同組合や協同組合的な働き方への理解は非常に深まったと言えるでしょう。キーワードとしては、稼ぐだけではない働き方、助け合いの精神、平等な職場づくりといった言葉が見られました。実際に働くことにより、事前学習会で学んだ協同組合の理念や目的が腑に落ちたり、営利企業と協同組合の違いを実際に感じたりといった記述も多かったです。これは組織の仕組みの違いについてしっかりと理解しているというよりは、提供する商品やサービスの理念の違いについて理解を深めたというケースも多いのですが、少なくとも自分たちがアルバイト先や他のインターン先で見えてきた資本主義の論理とは違うものを、学生が感じとることはできていたようです。このように協同組合への理解は非常に進んだのですが、その一方で、協同組合全体の理解と言うよりは、実習先の協同組合に特化した理解に留まってしまったケースが多く見られ、この点は今後の課題かもしれません。

子が見られました。また、ビジネススキルや社会人としての考え方なども学んでいるのですが、これは一般的なインターンシップとあまり変わらないように思います。

特筆すべきは、コミュニケーション能力の向上です。元々は人とのコミュニケーションに苦手意識を持っていた学生が多いのですが、働く上で意見をちゃんと伝え、聞くことの重要性和、その難しさや楽しさを実習で実感し、自分でもコミュニケーションを心がけるようにしたという記述が多く見られました。協同組合はとにかく意思決定の際に意見を求められる機会が多く、学生は人の話を聞いた上で自分の意見や判断をまとめたり、その上で齟齬を埋め合わせたりする経験を繰り返し積むことによって少しずつ自信を付けていったようです。もちろん、その場では上手にできなかった人も多いのですが、そこでネガティブにならず、次は頑張りたいとプラスな捉え方をしている学生がほとんどであることは印象的でした。これは、先ほどお話しした経験のところで触れた「傾聴される経験と喜び感情との結びつき」と関連しているのかもしれない。

価値観の変化として顕著に現れていたものは、やはり繋がりや助け合いの重要性を、実習を通じて再認識している点です。実習では、普段の生活では会わない、話さないような属性の人とのコミュニケーションを取る機会が多くあります。大学や学年の異なるインターンシップ生同士、実習先で出会う人々、組合員の方々など、様々な人々と繋がりながら仕事として何か成果を出していく経験は、学生にとってよい学びの場になりました。特に、そうして働く中で、同じ話題でも人によって全く異なる視点を持っていること、そしてその視点がその人自身の人生や働き方を反映したものである

知識・スキル・内面の学び
つながりやインターンシップの協同分析 ③ 2

③-2何を学んだか(知識・スキルの習得と内面の学び)		
社会の仕組み	社会の仕組み	産業、福祉・介護、保育、福祉、経済学、経営学、マーケティング、商品開発
	社会の安全に関する知識・意識	防災、災害救助の仕組み、防災意識の醸成、防災、食・物の知識
知識・スキルの習得	今まで見なかった社会の構造・仕組み	社会福祉協議会、児童館、障害・サポートステーションなど各種福祉、立法
	社会の現状	社会福祉協議会、児童館、障害・サポートステーションなど各種福祉、立法
仕事やものにも関心する	コミュニケーション能力	話し方、伝え方、傾聴、プレゼンテーションの仕方
	他人としての存在	社会人マナー、挨拶、目線、声かけ、身振りの重要性
働くことについて	働くことの意味	働くことの意味、働く意義、働く楽しさ、働く楽しさ
	働くことの意味	働くことの意味、働く意義、働く楽しさ、働く楽しさ
内面の学び	働くことの意味	働くことの意味、働く意義、働く楽しさ、働く楽しさ
	働くことの意味	働くことの意味、働く意義、働く楽しさ、働く楽しさ
信頼感・協調性の醸成	信頼感・協調性の醸成	信頼感・協調性の醸成、信頼感・協調性の醸成
	信頼感・協調性の醸成	信頼感・協調性の醸成、信頼感・協調性の醸成
自己の成長	自己の成長	自己の成長、自己の成長
	自己の成長	自己の成長、自己の成長

次に知識やスキルの獲得という意味での学びですが、ここでは社会の制度、社会課題とその構造といった、社会に関する学びが多く見られます。協同組合の多くが業務と関連する形で社会的な課題に関わっているということがあり、それらを学ぶことで社会の仕組みについて学びを深めている様

と気づくことは、彼らの価値観に大きな影響を与えたようです。さらに一歩踏み込み、自分自身の価値観も自分の今までの人生に支えられていたもので、ある意味では固定化されているのだという気づきにつながるケースも見られました。

それから、「働くこと」に対する考え方の変化も見られました。元々は労働に対してネガティブなイメージを持つ学生が多かったのですが、それがポジティブなイメージに転化した学生も居ますし、自分のこれからの人生にとって「働く」とはどういう意味を持つのかについてじっくりと考える機会になったという学生も居ました。

協同組合によるインターンシップの特徴として…

- ① 協同組合が手掛けている業務の幅広さ
 - ・インターンシップ生にとってはそれ自体が大きな魅力であり、プログラムの満足度に寄与している。
- ② 特に生協で顕著に見られた「組合員」のインパクトの大きさ
 - ・組合員は協同組合にとっては自明の存在であるが、学生にとってはそうではない。
 - ・「事業に関わるために出資する」という組合員の存在を丁寧に説明していくことで、学生の協同組合理解を深められる可能性がある。
- ③ 学生：意見を表明することへの苦手意識を克服
 - ・協同組合では、様々な場面で意見を求められる（一般的企業にはない特徴）
 - ・職場における心理的安全性？多くの学生が会議で感じた「協同の雰囲気」

以上の分析結果を踏まえてまとめていきますと、協同組合が行うインターンシップの特徴は、下記のような形で整理できるのでは無いかと思います。

1つ目は、協同組合が手がけている業務の幅広さが、学生の「これを経験してみたい」という気持ちに答えやすく、そのこと自体が大きな魅力になっていると考えられます。実際にそれがプログラムの満足度に繋がっているという側面もありました。

2つ目は、特に生協さんで顕著に見られた傾向ですが、組合員という存在のインパクトです。学生が前提としている価値観では、企業がマーケティングを通じて売れそうな商品を作り、自分たちは顧客として提示された商品を選んで購入することが当たり前前の消費のやり方です。ところが組合員

は、顧客のポジションにありながら自分たちがほしいものを求めて商品の開発・生産に関わっていきまますし、しかもそのためにわざわざ出資をする。なぜ組合員がそうするのか、組合員の存在を丁寧に説明していくことによって、協同組合とはどのようなものか、理解を深めることができるのかもしれません。

3つ目に、自分の意見を表明することの重要性を理解したり、苦手意識を克服しようとしたりする傾向が学生に見られることです。職場において自分の考えを話すこと、意見表明をすることに関連する概念として、近年、心理的安全性が注目を浴びています。これは、自分が何を言っても受け入れてもらえると思えない、心理的安全性が担保されていない場所では、なかなか本音が話せないというものなのですが、多くの学生が感じたと言っている「協同の雰囲気」というのは、この心理的安全性に近いものなのではないでしょうか。ここならば自分の考えを言っても否定されない、ちゃんと受け止めてもらえるという空気を学生が感じられた。そのことが学生自身の成長につながったと考えられます。

以上のような特徴は、優秀な人材をピックアップすることを目的とした一般企業におけるインターンシップではあまり見られません。

最後に、こうした調査に携わったり、大学生に協同組合を教えたりしながら、個人的に考えていることを少しお話しさせて頂いて終わりにしようと思います。

大学生にとって、協同組合の当たり前が当たり前ではないということは、今回の報告でも折に触れお話ししてきました。その齟齬を丁寧に埋めて、今後若い世代が協同組合に自発的に関心を持ってもらうように

アピールをしていかなければ、彼らに組合員や職員として次世代の協同組合を担ってもらうことは難しいのでは無いかと感じています。

我々は協同組合を説明する際に、総じて理念や原理、そして社会的に何を成し遂げてきたかを語ることが多いと思うのですが、おそらくそれだけでは、学生が抱えている「企業もSDGsを意識して事業を行っている現在で、なぜ協同組合がよいのか？」という疑問に対する十分な答えとなっていないのではないかと感じる事が多々あります。冒頭に述べたように、大学生の間には、プロセスを圧縮して効率を追求することが良いことという価値観が浸透しています。一方、協同組合はプロセスを重視する事業体であり、いかに効率的に効果を上げるかを最大の目的とした組織ではありません。そこで必要となってくるのが、彼らが軽視しがちなプロセスの重要性について丁寧に説明をしていくことではないかと思えます。それは例えば、理念や原則を実際にどう労働の現場に落とし込んで運用しているのかというガバナンス上のプロセスであったり、協同組合で事業を行っていく中で直面する現実的な課題に対して、どう協同組合らしく対応しているのかといった解決のためのプロセスであったり、そうしたことを丁寧に説明していくこと自体が、学生に協同組合の意義や存在価値を伝えていく鍵になっているのではないかと考えております。

また、若い世代に協同の価値を伝えていくというという意味では、そもそも若い世代の人々にとって、協同組合が自分たちに必要な組織として認識されているのか、存在感を発揮できているのかということは、我々研究者も真剣に考えていかなければならないステージに来ていると思えます。も

ちろん、私自身は協同組合の価値を高く評価しておりますし、この先の社会にとっても非常に有効なものだと思っておりますが、現状として若い世代が「〇〇は私たちの協同組合だ」と感じられるような協同組合があるのかというと、なかなかそこまでのアプローチが出来ていないのでは無いかと感じています。今回私がお話した東京近郊の四年制大学に通う大学生という「若い世代」にはまだ大学生協がありますが、大学への進学率などを考えますと、当然全体をカバーしているとは言い難い状況です。同じ若い世代でも異なる属性を持った人々はたくさんおりますし、そうした人々にどう協同組合をアプローチしていくかと言う課題については、私自身もこれから向き合っていていきたいですし、そのためにはぜひ皆様のお知恵を拝借できればと思っております。

ということで、最後はとりとめの無い内容となってしまって恐縮ですが、長い時間ご清聴頂きまして、ありがとうございました。